The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『建礼門院右京大夫集』再出仕歌群の位置づけ
Author(s)	丹下, 暖子
Citation	詞林. 2012, 51, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67639
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『建礼門院右京大夫集』再出仕歌群の位置づけ

丹下　暖子

一、はじめに

『建礼門院右京大夫集』[1]（以下『右京大夫集』）は、建礼門院徳子に出仕し、平家一門とも親しく交流した女性の視点から、源平の動乱前後の時代を捉え、記した作品である。徳子への出仕時代のさまざまな詠歌[2]や平家の都落ち後の悲哀を詠んだ歌に加え、末尾[3]には後鳥羽天皇への再出仕時代の詠歌（322～356）が収められている。

この再出仕時代の詠歌（以下、再出仕歌群とする）について、注目されてきたのは、右京大夫の恋人、平資盛の追慕という『右京大夫集』の主題との関わりである。特に歌群の掉尾を飾る、後鳥羽院が俊成に九十歳の祝賀を賜った折のやり取りをめぐって、入木道の名誉を描く記事[4]なのか、それとも、やはり資盛の追慕という観点から読み解くべき記事[5]なのかが問題視されてきた。つまり、九十賀という行事のもつ晴れやかさや明るさが、それまでの右京大夫の資盛追慕の思いにそぐわないとして、読解が試みられてきたわけである。

だが、家集の構成に目を向けてみると、この俊成九十賀の記事を含む再出仕歌群の直前には、それまでの資盛没後の一連の詠歌との隔たりを示すかのように、五十一首もの七夕歌から成る七夕歌群（271～321）が配置されている。再出仕歌群と『右京大夫集』の主題の関わりは、七夕歌群が示唆する隔たりを視野に入れつつ、論じる必要があるだろう。

そこで、本稿では、『右京大夫集』を締めくくる再出仕歌群について、七夕歌群前後の詠歌の隔たりに注目しながら、その位置づけを検討してゆく。そのうえで、『右京大夫集』全体の構成の問題にも言及したいと思う。

二、再出仕歌群の構成

まずは再出仕歌群の冒頭を確認しておこう。歌群は、後鳥羽天皇に出仕することになった経緯を述べるところから始まる。

若かりし程より、身をようなき物に思ひとりにしかば、たゞ心よりほかの命のあらるゝだにもいとはし

きに、まして人に知らるべきことは、かけても思はざりしを、さるべき人々、さりがたくいひはからふことありて、思ひのほかに、年へてのち、又九重の中を見し身の契り、返々さだめなく、我心のうちもすぞろはし。藤壺の方ざまなど見るにも、昔住みなれしことのみ思ひ出でられてかなしきに、御しつらひも、世のけしきも、かはりたる事なきに、たゞ我心のうちばかり、くだけまさるかなしさ。月のくまなきをながめて、おぼえぬ事もなく、かきくらさるゝ。昔軽らかなる上人などにて見し人々、重々しき上達部にてあるも、「とぞあらまし、かくぞあらまし」など思ひつゞけられて、ありしよりもけに、心のうちはやらんかたなくかなしきこと、なににかは似ん。高倉の院の御けしきに、いとよう似まゐらせおはしましたる上の御さまにも、数ならぬ心の中ひとつにたへがたく、来し方恋ひしくて、月を見て

今はたゞしひて忘るゝいにしへを思ひ出でよとすめる月かげ（322）

再出仕の経緯に続けて、再出仕後の宮中では何を見ても徳子に出仕していた日々を想起し、悲しみを新たにする状況にあったことを述べる。特に傍線部では、昔は「軽らかなる上人」として見た人々が「重々しき上達部」に変わっているのを目の当たりにして、資盛追慕の思いを深めてゆく様子が記されている。再出仕した宮中は、右京大夫が忘れようとするかつての日々を思い出させる場として、まず描かれる。と同時に、昔、見た人々の変化に接する場でもあり、時代の移り変わりを認識せざるを得ない状況であったことも示されている。

徳子への出仕時代の追憶と、資盛の追慕に始まる再出仕歌群は、どのように構成されているのだろうか。以下に全容を示す。

①再出仕の経緯と再出仕後の宮中の様子（322～329）
②籠居中の藤原隆房との贈答（330・331）
③藤原実宗の死と、子の公経との贈答（332・333）
④平親宗の死と、子の親長との贈答（334～348）
⑤若くして没した源通宗との思い出（349～353）
⑥俊成九十賀（354～356）

先の322番歌を併せ、再出仕した当初の心境などを詠んだ歌が八首続いた後、故人を偲ぶ贈答などが配され、俊成九十賀の記事で締めくくられている。各歌の詠作時期については、まず右京大夫の再出仕が建久六、七年（一一九五、六）頃のことと考えられている。[6] 隆房との贈答は正治二年（一二〇〇）頃のこと、実宗の没年は建暦二年（一二一二）、親宗の没年は正治元年（一一九九）、通宗の没年は建久九年（一一九八）である。俊成九十賀の祝宴は建仁三年（一二〇三）十一月二十三日に催された。

このように、歌群は主に再出仕から五、六年ほどの間の出来事から成り、多少の前後はあるものの、おおよそ詠作年次の順に並んでいるのだが、実宗の死について、子の公経と交わした贈答（③）だけが、詠作の時期においても、年次順の配列においても、大きく外れていることに気づく。この贈答は、歌群を締めくくる俊成九十賀の九年後のもので、年次順の配列では歌群の最終記事となる出来事であった。勿論、年次順よりも、故人を偲ぶ贈答を続けて並べることを優先した結果、歌群の中程に据えられたと解されるのだが、同時に、俊成九十賀の記事を特に歌群の末尾、すなわち『右京大夫集』の末尾に配置しようとした結果とも捉えられるだろう。

先行研究でも関心の高かった俊成九十賀の記事は、再出仕歌群の構成という観点からも、とりわけ注目されるものであることが見えてくる。この記事については、四節で特に検討することとして、次節では、この歌群に特有の記述を取り上げ、歌群の傾向を確認してゆく。

三、再出仕歌群に見られる傾向

前節で確認したとおり、再出仕歌群は、その冒頭から、かつての日々の追憶と資盛追慕の思いを述べてゆく。これは冒頭以外でも見られるもので、たとえば、偶然、資盛の名を耳にした折の心境が「水のあわと消えにし人の名ばかりをさすがにとめて聞くもかなしき」（327）といった三首の歌にまとめられている。また、源通宗の早すぎる死（350）から資盛を連想し、「限りありて尽くる命はいかゞせん昔の夢ぞなほたぐひなき」（351）など、資盛を追慕する三首を連ねる場面もある。再出仕した宮中の様子にかつての日々を思い起こし、追慕の思いを新たにするという展開は、歌群の中心を占めている。『右京大夫集』の主題は、この歌群においても確かに一貫している。

一方で、再出仕歌群には、七夕歌群以前には見られない、歌群特有の記述がある。この特有の記述は、歌群の傾向を探るにあたっては、『右京大夫集』を貫く主題以上に看過できないものだろう。以下、具体的に確認してゆく。

次に挙げるのは、再出仕した宮中の様子を語ってゆく中の一首である。

その世の事、見し人、知りたるも、おのづからありもやすらめど、かたらふよしもなし。たゞ、心の中ばかり思ひつゞけらるゝが、晴るゝかたなくかなしくて

我思ふ心に似たる友もがなそよやとだにもかたりあはせん（325）

傍線部には、「その世の事」、すなわち徳子に出仕した時代のことを知る人はいるかもしれないが、語り合うすべもないとある。歌には、自分と同じように昔を恋い慕う「友」を求める思いが詠まれている。右京大夫とともにかつての日々を

懐かしみ、語り合う相手もいない再出仕後の宮中での感慨を端的に表現した一首である。

再出仕歌群には、こうした徳子に出仕したかつての日々について語り合える人がいないことを嘆く場面が散見する。宮中で見かける犬も、「犬はなほ姿も見しにかよひけり人のけしきぞありしにも似ぬ」（324）と、周りにいる人々の様子が昔とは違うことを認識するきっかけとなってしまうほどなのである。

さらに、往事を知る人の死も記されている。

大宮の入道内大臣うせられたりし比、公経の中納言かきこもりて、五節などにもまゐられざりしに、白薄様の、いろ〳〵の櫛をかきたるにかきて、人のつかはししにかはりて

まよふらん心の闇を思ふかな豊の明りのさやかなるころ（332）

かへし

かきこもる闇もよそにぞなりぬべき豊の明りにほのめかされて（333）

前節でも触れた藤原実宗の没後、子の公経と交わした贈答である。実宗は、徳子への出仕の様子を詠んだ歌が中心となる前半部（2～203）の冒頭近くに登場し、右京大夫と機知に富んだ贈答を交わした人物であった（4・5、6・7）。かつての華やかな日々を知り、右京大夫とともに語り合うことができる人物であったはずだが、ここでは、その死が記されている。

公経との贈答に続けて、さらに平親宗の死についても言及がある（334～346）。親宗は平時子の同母弟であり、やはり平家の栄華を見てきた人物であった。こうした往事を知る人の死は、そのまま、かつての日々について語り合うことが叶わなくなった状況を示している。

勿論、再出仕歌群に徳子に出仕した昔を知る人が一切登場しない、というわけではない。

隆房の中納言の、なげく事ありて、こもりゐたるもとへ、こればかりは、昔のこともおのづからいひなどする人なれば、とぶらひ申とて、五月五日に

つきもせぬうきねは袖にかけながらよその涙を思ひやるかな（330）

かへし

かけながらうきねにつけて思ひやれあやめも知らずくらす心を（331）

前半部にも幾度か登場した[7]藤原隆房との贈答である。傍線部からは、隆房が右京大夫と「昔のこと」を話す仲にあったことが知られる。ただし、「こればかりは」とあることに注意しておきたい。「昔のこと」を語り合える相手は、極めて限られていたとするのである[8]。

このように、再出仕歌群には、徳子に出仕し、平家一門と

ともに過ごしたかつての日々のことを語り合えない状況が繰り返し記されている。こうした記述は七夕歌群以前に見られず[9]、再出仕歌群に特有のものである。

むしろ、七夕歌群以前の詠歌には、再出仕歌群とは対照的な姿勢が窺える。

睦月のなかば過ぐるころなど、なにとなく春のけしきうら〳〵とかすみわたりたるに、高倉院の中納言の典侍ときこえし人、今の内にさぶらはるゝが、「あはん」とありしかば、昔の事知れる人もなつかしくて、その日を待つ程に、さしあふ事ありて、とゞまりぬ。今宵にてあらましと思ふ夜、荒れたる家の軒端より月さし入りて、梅かをりつゝ艶なり。ながめ明かして、つとめて申やる

あはれいかにけさはなごりをながめまし昨日の暮れのまことなりせば（259）

かへし

思へたゞさぞあらましのなごりさへ昨日も今日もありあけの空（260）

七夕歌群直前に配置される、「昔の事」を知る高倉院中納言典侍と会う約束をしていた折の贈答である。かつて高倉院に仕えた女房と共有する「昔の事」とは、主に徳子に出仕した日々を指すのだろう。この時は取りやめになってしまったものの、「昔の事」を語り合おうとしていたことが知られる場面である。

次に挙げる贈答の場合、「昔の事」を語り合ったことが記されている。

殿富門院、皇后宮と申し比、その御方にさぶらふ上臈の知るよしありて、きこえかはししが、行きあひて、ひぐらし物がたりして、帰り給ぬるなごり、雨うち降りて、物あはれ也。この人も、ことに我おなじ筋なることを思ふ人なり。なつかしくもあり、さまゞ〳〵それも恋しく思ひ出でられて、申やる

いかにせんながめかねぬるなごりかなさらぬだにこそ雨の夕暮（263）

かへし

ながめわぶる雨の夕べにあはれ又ふりにしことをいひあはせばや（264）

傍線部にあるように、一日中語り合った後、交わした贈答である。贈答の相手である皇后亮子の女房は、「我おなじ筋なることを思ふ人」、すなわち右京大夫同様、平家一門の人と恋仲にあった女性であった。ここで語り合われた内容とは、源平の動乱による悲哀であり、『右京大夫集』にそれまで記されてきたことだろう。

このように、七夕歌群の直前には、徳子に出仕した日々や平家一門の都落ち後のことを右京大夫とともに語り合う人が登場する。七夕歌群以前は、源平の動乱によって失われてし

まったかつての日々への思いを共有する人が存在する時代として描かれているのである。

それに対し、語り合う人の不在を殊更に記してゆくのが、再出仕歌群の傾向であり、注目すべき特徴と言える。この特徴からは、再出仕した日々を、七夕歌群以前が記述対象とする時代とは明らかに隔たりのあるものとして捉えていたことが見えてくるだろう。勿論、右京大夫自身は変わることなく徳子に出仕した昔を恋い慕い、資盛を追慕しているのだが、再出仕した宮中は、以前とは違う、「昔のこと」を語り合えない時代の到来を認識してゆく場として描かれているのである。こうした右京大夫の時代認識において、七夕歌群の前後の詠歌は決してつながらないものであったはずである。そして、それを明示するのが、『右京大夫集』に配置された七夕歌群であった、と考える。[10]

四、再出仕歌群の位置づけ

前節では、再出仕歌群に特有の記述を指摘し、歌群の傾向を確認してきた。では、かつての日々について語り合う人がいないことを記す再出仕歌群は、『右京大夫集』においてどのように位置づけられるものなのだろうか。本節では、特に再出仕歌群の末尾に置かれた俊成九十賀の記事に注目して、この問題を考えてみたい。

俊成九十賀の記事とは、後鳥羽院が俊成に九十歳の祝賀を賜った折のことを記したものである。後鳥羽院より俊成に贈られる袈裟に宮内卿が歌を詠むことになっており、右京大夫は宮内卿の詠んだ歌を紫の糸で刺繍するという役割を担っていた。

やや長くなるが、以下に九十賀の記事を挙げる。

建仁三年の年、霜月の二十日余りいくかの日やらん、五条の三位入道俊成、九十に満つと聞かせおはしまして、院より賀たまはするに、おくり物の法服の装束の袈裟に、歌を書くべしとて、師光入道の女宮内卿の殿に歌は召されて、紫の糸にて、院の仰せ事にて、おきてまゐらせたりし

ながらへてけさぞうれしき老の波八千代をかけて君につかへん（354）

とありしが、給たらん人の歌にては、今すこしよかりぬべく、心のうちにおぼえしかども、そのまゝにおくべきことなれば、おきてしを、「けさぞ」の「ぞ」文字、「つかへん」の「む」文字を、「や」と「よ」とになるべかりけるとて、にはかにその夜になりて、二条殿へまゐるべきよし、仰せ事とて、範光の中納言の車とてあれば、まゐりて、文字二おきなほして、やがて賀もゆかしくて、よもすがらさぶらひて見しに、昔のことおぼえて、いみじく道の面目なのめならずおぼえしかば、つとめて入道のもとへそのよし

申つかはす
君ぞなほけふより後もかぞふべき九かへりの十のゆくすゑ（355）

返事に、「かたじけなき召しに候へば、はふ〳〵まゐりて、人目いかばかり見苦しくと思ひしに、かやうによろこびいはれたる、猶昔の事も、物のゆゑも、知ると知らぬとは、まことに同じからずとて

亀山やこゝの返りの千年をも君が御代にぞそへ譲るべき（356）

宮内卿の詠歌（354）は、俊成の立場で詠んだものとなっており、右京大夫は不審に思いながらも、そのまま刺繍したところ、案の定、刺繍し直すことになった。その後、賀宴を見て「昔のこと」が思い出された右京大夫は、翌朝、俊成に祝いの言葉を贈る。俊成からの返事には、「猶昔の事も、物のゆゑも、知ると知らぬとは、まことに同じからず」とあった。以上が、『右京大夫集』の俊成九十賀の記事である。

先にも述べたが、従来、この記事をめぐって注目されてきたのは、右京大夫の資盛追慕の思いとの関わりである。入木道の世尊寺家の女房としての名誉を語った記事という捉え方がまず基本となるが、さらに傍線部の「昔のこと（事）」は、寿永二年（一一八三）二月に『千載集』を撰進するよう後白河法皇の院宣が資盛の奉書で下されたことを指すとして、この記事に資盛への思いを読み取る見解[11]もある。

俊成とのやり取りを理解する上で、記事中に二度も言及される「昔のこと」に注意すべきであることは確かだが、必ずしも資盛の追慕と結びつけて限定的に解釈することもないように思われる。それよりも、二節で指摘したとおり、この記事が再出仕歌群の末尾に特に配されたものであり、それまでの内容を締めくくる位置にある点に注目すべきではないだろうか。

前節で確認したことだが、再出仕歌群において繰り返し述べられてきたのは、「昔のこと」を語り合える人の不在である。それが、この記事に至って右京大夫は「昔のこと」を思い出し、さらに俊成から「昔のこと」も物の道理[12]も知っている人と知らない人とでは同じではない、という一言を得る。この俊成の言葉は、右京大夫を「昔のこと」を知る人として認めるものだろう。つまり、再出仕歌群全体を通して見たとき、往事を知る人もわずかになる中、右京大夫こそが「昔のこと」を知る存在であると、最後に俊成を通して述べる形になっているのである。

『右京大夫集』は、源平の動乱前後の時代をその時々の詠歌により描いてゆく作品である。まさに「昔のこと」を語るわけだが、九十賀の記事における俊成の言葉や再出仕歌群は、その語り手として右京大夫がいかにふさわしい人物であるかを示してゆくものと言えるだろう。特に、九十という長寿を得た俊成の言葉のもつ意味は大きい。右京大夫よりはるかに

多くを知る俊成からも、「昔のこと」を知る人物として認められたことになるのである。

さらに、この俊成九十賀の記事は、以下に引用する『右京大夫集』編纂の契機と関わる定家との贈答をも視野に入れて捉えるべきものではないだろうか。

老の後、民部卿定家の歌を集むることありとて、「書きおきたる物や」とたづねられたるだにも、人数に思ひ出でて、いはれたるなさけ、ありがたくおぼゆるに、「いづれの名をとか思ふ」ととはれたる思ひやりの、いみじうおぼえて、なほたゞ、へだてはてにし昔のことの忘れがたければ、「その世のまゝに」など申とて

言の葉のもし世に散らばしのばしき昔の名こそとめまほしけれ（358）

かへし　民部卿

おなじくは心とめけるいにしへのその名をさらに世に残さなん（359）

とありしなん、うれしくおぼえし

跋文（357）に続けて記される、『右京大夫集』最後の贈答である。『新勅撰集』の撰集資料として定家から家集の提出を求められたことが、『右京大夫集』編纂の大きな契機であったと知られる。

定家に提出された家集が、現在見る『右京大夫集』の形と完全に一致するかどうかは分からないが、大きくは変わらないはずである。詞書に記された詠作事情こそが大きな意味をもち、右京大夫の視点で捉えた「昔のこと」を語る家集であったと考えてよいだろう。こうした家集は、当時の女房歌人の家集として一般的とは言いがたい。しかし、俊成九十賀の記事があることによって、かつての日々を知る人もわずかになる中、定家の父、俊成も認めた「昔のこと」を知る人物が編纂した家集という、他の家集にはない価値が生じてくるのである。このように、歌群末尾に配された俊成九十賀の記事には、家集の提出先である定家に向けられた右京大夫の視線も窺うことができるのである。

以上、俊成九十賀の記事に注目してきた。この記事は、入木道の世尊寺家の女房としての名誉を語るのみならず、右京大夫自身を「昔のこと」の語り手として位置づけようとするものであったと言える。それは、「昔のこと」を語り合える人の不在を殊更に記す再出仕歌群全体に当てはまることだろう。つまり、再出仕歌群は、右京大夫が自身の視点で源平の動乱前後の時代を語ること、すなわち『右京大夫集』を編纂することの妥当性と、その価値を物語る歌群として位置づけられるのである。

五、おわりに

本稿では、再出仕歌群について、七夕歌群前後の詠歌の隔

たりなどに注目しながら考察してきた。七夕歌群以前が、それぞれの詠歌により、徳子への出仕時代や平家の都落ち後の日々といった「昔のこと」を描く一方で、再出仕歌群はその語り手として右京大夫自身を位置づけてゆくものであったと捉えられる。この構図を踏まえて、最後に『右京大夫集』全体を見てみよう。『右京大夫集』の構成を、次の【表】にまとめた。

【表】『建礼門院右京大夫集』の構成

	歌番号	内容
前半部	1	序
	2～13	高倉天皇と徳子をめぐる交流
	14～53	題詠歌群（四十首）
	54～134	平家一門を中心とした交流
	135～173	恋に関する歌群
	174～183	「秋の山里」歌群
	184～203	「ゆかり」ある人に関する歌
後半部	204～270	平家一門の都落ちから資盛の忌日供養まで
	271～321	七夕歌群（五十一首）
	322～356	後鳥羽天皇への再出仕
	357	跋
	358・359	藤原定家との贈答

『右京大夫集』は、平家一門の都落ちに言及する204番歌を境として、前半部と後半部に大きく分けられる。両者の間にはさまざまな差があり[13]、また、前半部には完結性があることから[14]、この区分には、『右京大夫集』の成立の問題も関係してくる[15]。

ただし、歌の形式という面から『右京大夫集』を見るとき、大きな区切りとなるのは、題詠歌群と七夕歌群である。この二つの歌群は、長い詞書を伴う歌が中心となる『右京大夫集』において明らかに異質なもので、その前後の歌の内容にも差異が見られる[16]。

前半部と後半部の差は、記述対象となる出来事の違いによるところもあることを考慮すると、むしろ、題詠歌群と七夕歌群による区分の方が、現在見る『右京大夫集』について考えるとき、大きな意味をもつのではないだろうか。前半部と後半部の間は、ひと続きのものとして認識されていたのではないかとも思われるのである。

次に挙げるのは、『右京大夫集』の跋文である。

返す〳〵うきより外の思ひ出でなき身ながら、年はつもりて、いたづらに明かし暮らすほどに、思ひ出でらるゝ事どもを、すこしづゝ書きつけたるなり。おのづから人の「さる事や」といふには、いたく思ふまゝの事かはゆくもおぼえて、せう〳〵をぞ書きて見せし。これはたゞ我が目ひとつに見むとて書き

つけたるを後に見て
砕きける思ひのほどの悲しさも書きあつめてぞさらに知らるゝ（357）

跋文からは、『新勅撰集』撰集時以前にも、右京大夫には詠歌をまとめ、人に見せる機会があったことが知られる。右京大夫の長い生涯のうちには、詠歌をまとめる機会も複数回あったはずであり、それらをとりまとめたのが、現在見る『右京大夫集』だと考えられるだろう。定家から家集の提出を求められた最晩年の右京大夫が自身の生涯を見つめ直したとき、資盛との恋の始まりから別離、追慕の日々は一連のものとして認識されたのではなかったか。この認識が、題詠歌群や七夕歌群による詠歌の区分という形で表されていると捉えられるのである。

そして、本稿で取り上げた再出仕歌群は、その後日談としての性格を帯び、再出仕した日々を、一連の「昔のこと」を語り合う人もいなくなった時代として描いてゆく。こうした時代認識と関わって、右京大夫が自身の視点で捉えた「昔のこと」を記すこと、すなわち『右京大夫集』を編纂することの価値や意味が示され、『右京大夫集』は締めくくられるのである。

注

（1）『建礼門院右京大夫集』の引用及び歌番号は、谷知子校注、和歌文学大系『建礼門院右京大夫集』（明治書院、二〇〇一年）に拠る。

（2）徳子への出仕時代の詠歌を中心とする前半部については、拙稿（「『建礼門院右京大夫集』前半部の構成」（『詞林』三八、二〇〇五年十月）、「『建礼門院右京大夫集』資盛・隆信歌群の再検討―「色好むと聞く人」をめぐって―」（『和歌文学研究』九六、二〇〇八年六月））において論じたことがある。

（3）『右京大夫集』は、再出仕歌群の後にも、跋文（357）、定家との贈答（358・359）が続くが、いずれも後日談としての性格が強いものである。『右京大夫集』の実質的な最終記事は、再出仕歌群の俊成九十賀である。

（4）冨倉徳次郎『建礼門院右京大夫　太皇太后宮小侍従』（三省堂、一九四二年）、遠田晤良「建礼門院右京大夫私考」（『国語国文研究』十七、一九六〇年十月）など。

（5）後藤重郎「建礼門院右京大夫集に関する一考察―俊成九十賀の記事をめぐって―」（『名古屋大学文学部研究論集』四九、一九七〇年三月）、同「建礼門院右京大夫集に関する一考察―俊成九十賀記再考―」（『名古屋大学文学部研究論集』八五、一九八三年三月）など。

（6）なお、隆房との贈答の時期については、元暦二年（一一八五）の父、隆季の喪に服していた頃とする説、正治二年三月から元久元年（一二〇四）までの散位であった頃とする説がある（藤田一尊「隆房のなげき―『建礼門院右京大夫集』私見―」（『解釈』三六・四、一九九〇年四月）参照）。本稿では、右京大夫の再出仕

の時期から考えて、正治二年と判断している。

（7）『右京大夫集』において隆房が登場するのは、前半部の二場面（9～11、94～97）。

（8）田渕句美子「建礼門院右京大夫試論」（『明月記研究』九、二〇〇四年十二月）は、右京大夫がその後半生に出仕した後鳥羽天皇内裏や七条院周辺について「かつての平家時代を共有した人々は、作者の周囲に数多くいた」ことを指摘する。再出仕歌群に記される、「昔のこと」を語り合える相手の不在は、『右京大夫集』において特に作り出された状況であったとも考えられる。

（9）なお、資盛の悲報に接した直後には、友人の見舞いに対し、「かなしとも又あはれとも世のつねにいふべきことにあらばこそあらめ」（223）と思うなど、資盛の死による悲しみを例のない、他者と共有することが叶わないものとする記述が見られるが、本稿で取り上げる、再出仕歌群に記される「昔のこと」を語り合えない状況とは性質を異にするものである。

（10）七夕歌群は、資盛と別れた後、後鳥羽天皇に再出仕するまでの「時間的空白を繋ぎ埋める」ものとされてきたが（後藤重郎「建礼門院右京大夫集七夕歌に関する一考察」（『名古屋大学文学部研究論集』五二、一九七一年三月）など）、その役割については再検討する必要があるだろう。稿を改めて論じる予定である。

（11）後藤重郎前掲注（5）論文。

（12）野崎順子「『建礼門院右京大夫集』における俊成九十賀記について―「物のゆゑ」の解釈を中心に―」（『日記文学研究誌』十、二〇〇八年三月）は、「物のゆゑ」に注目し、これを「争乱時代に対する理解」と解釈する。

（13）最も大きな差としては、配列方法が挙げられる（前半部―連想による配列　後半部―時間の推移に従った配列）。また、前半部には過去形、後半部には現在形が多く用いられるといった差も見られる。この他、信太周「建礼門院右京大夫集考―上・下両巻の間における擱筆の想定をめぐって―」（『言語と文芸』五‐五、一九六三年九月）は、題詠歌群の占める割合、叙景歌（四季歌）の占める割合、恋歌のとりあつかい、回想集団の数、連想の形成、の相違を指摘する。

（14）今関敏子「建礼門院右京大夫集に於ける月―徳子の存在及び星に関連して―」（『中世女流日記文学論考』和泉書院、一九八七年、初出は一九七八年）は、前半部冒頭の2番歌と、末尾の202・203番歌の対応関係を指摘する。

（15）『右京大夫集』の成立については、一括成立説、二期成立説などがあり、前半部と後半部の間に擱筆を認めるものもある。なお、成立説については、野沢拓夫「『建礼門院右京大夫集』研究の展望と問題点」（『女流日記文学講座』第六巻、勉誠社、一九九〇年）にまとめられている。

（16）題詠歌群については、井狩正司「建礼門院右京大夫集構想論のための覚書（一）―第一四番以下四〇首の題詠歌の配置の意図をめぐって―」（『語文（日大）』十五、一九六三年六月）が、歌群以前の歌が「資盛との恋を体験する以前の、明朗な時期のものに限られている」ことから、「先行している筆録を締め括る意図をもって据えられている」と指摘されている。また、七夕歌群については、本稿で検討したとおりである。

（たんげ・あつこ　本学特任研究員）